

未来の草庵

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

有名人の在宅動画

本誌が発行されるのは、原稿締め切りから二カ月後。この原稿は四月二十日に書いている。本号が皆様の手元に届く頃には、新型コロナウイルス問題が峠を越えていけば良いのだが…。

事態の深刻化が日本よりも早かった諸外国では、外出禁止の閉そく感を何とかしようと、色々な素人撮影(風)の楽しい動画が、三月初旬から次々にアップされてきた。

三月半ば過ぎだったろうか、イタリアやアメリカの友人に見舞いのメールを送った時に、ニューヨークの

人が集まらない建築

ローリング・ストーンズにせよ、往年のニール・ダイヤモンドにせよ、これこそ国立競技場クラスの会場一杯に人を集められるアーティストだ。それが今や、一人ひとりが自分だけの部屋で歌い奏で、ネット空間上にそれを流す。聴く方の私達は、これまた自分だけの部屋のパソコンでそれを楽しむ。人は集まらない。SF的だが二〇二〇年の現実だ。

この災厄がきっかけとなってこういうコミュニケーションの方法が進化しつつ普及したとしたらどうだろう。多くの建築は不要になってしまふのではないか。一般的に建築は、人が集まる場所を成り立たせるためにあるのだから。

そう考えると、未来の社会の展開の仕方によっては、従来のような人が集まる建築ではなく、人が集まらない建築を多様に構想する必要がある出てくるのかもしれない。

人が集まらない建築。それはこれまでになかったわけではない。人が集まらない一人だけの簡素な暮ら

友人から、往年の大物歌手ニール・ダイヤモンドの最新動画の存在を教えられた。一九六九年のヒット曲「スウィート・キャロライン」を「手を洗おう」という感染予防の替え歌にして、八〇歳手前の本人が自宅で弾き語りする動画だった。

大物歌手の自宅と思しき場所である。白い石の暖炉と寄木フロア風の床とその上に敷かれた絨毯に寝転ぶ犬。ケバケバしくもなく、かと言って質素すぎもしない暖かみのある部屋だ。

次々に出てくるとすると、これは面白いと思った。そして、案の定、四月に入ると同種の動画が次々にアップされた。一つだけ代表的な例を挙げておこう。ザ・ローリング・ストーンズの動画だ。

七三〜七九歳のミック・ジャガー、キース・リチャーズ、チャーリー・ワッツ、ロン・ウッドの四人がそれぞれの自宅の部屋らしき場所で演奏している。それぞれの部屋がそれぞれ違いはするものの、どこと言って尖ったところのない、落ち着いた雰囲気普通の部屋であることは少々意外だった。建築屋だけが持つてしまふ感想だろうかと思うが。

が還暦を迎えた頃のことである。四畳半とは言っても、寝床だけではない。法華経を置く机があり、その前の壁には阿弥陀仏の絵像と普賢菩薩の絵像が飾られていた。角には竹の吊り棚があり、その上の黒い皮籠三個に和歌・管弦の書、「往生要集」等の抜き書きが入れてあった。外との境界には竹のすのこの縁があり、その脇には水や花などを仏に供える関伽棚も設けられていた。琴と琵琶もあり、長明は毎日それを演奏し歌っていたらしい。近くに少年がいて、彼を友として遊びながら周囲を散歩したりもしていた。

この方丈、災厄に見舞われ、複雑な人間関係に翻弄される都に比べれば、はるかに豊かな精神生活を送ることができるように設えられていたのである。

その後日本には、理想の住まいとして隠者の草庵の系譜が続くが、人と人のコミュニケーションのあり方が根本的に変わっていくことになれば、この方丈の豊かさを手掛かりに未来を想像すれば良い。日本には良い古典がある。



河合神社(京都市左京区)にある復元された鴨長明の方丈の庵
(写真撮影: 亀井靖子氏)

しを理想として構想された建築があった。「草庵」と呼ばれる類の建築だ。その代表は「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」で誰もが知る古典文学『方丈記』の作者鴨長明の草庵「方丈」である。

かなりの部分は、十二世紀後半に次々と京都を襲った大火、竜巻、遷都、飢饉、疫病、大地震の災厄の惨状の記述が占めており、そのいわば今次の新型コロナウイルス問題と同様の不条理さを「ゆく河の流れは絶えずして」と表現したのだ。その上で長明は、人里離れた山中に、「方丈」、今の言い方で言えば僅か四畳半の分解移設可能な小屋を建て、そこで一人暮らしを始めた。彼

鴨長明の方丈

よく知られるように、この著作の